

身体の社会学を構築する意義とその可能性

清水 諭¹⁾

The significance and possibilities for constructing sociology of body

Satoshi Shimizu¹

Abstract

This paper reviews historical background of setting up problems of sport sociology and taken up a meaning of body as an independent subject within sport sociology. While putting a focus on the body, it contributes to opening a new horizon in cognition theory, as referred to from the genealogy of French ethnology and sociology. The author discusses theoretical meaning and concrete strategy in a construct of sociology of body, basing mostly on :

- 1) M. Mauss — his theory of vision and method in *《technique du corps》*
- 2) C. Levi-Strauss — his theory of *《unconscious》*
- 3) P. Bourdieu — his theory of vision in *《habitus》* and look at the body

Constructing sociology of body, means to focus on body that brings over boundaries of objective structure/subjective practice, consciousness/unconsciousness and verbal/non-verbal. That focus seems helpful to open a new horizon in cognition theory.

Finally, as a concrete subject in sociology of body, you can find in this paper a plain debate on Japanese *《technique du corps》* and their mental analyses taken under relation to military training and physical education. The author explains the significance of such relation and importance of this subject and its methodology.

Key words : sociology of body, les techniques du corps, habitus

(Japan J. Phys. Educ., 38 : 1 -11, May, 1993.)

キーワード：身体社会学, 身体技法, ハビトゥス

1. スポーツ社会学における課題設定の歴史性と根本的課題としての身体

日本のスポーツ社会学界における課題は、どのようにして生み出されてきたのか。このことは、これまで多くの所で研究する必要があるといわれながらも、いまだに手がつけられていない。第1回日本体育学会(1950)において林が、はじめて名称としてのスポーツ社会学を提起したとされて以

来(菅原¹⁵⁾p.4), 数々の「スポーツ社会学」に関するテキストが示されてきたものの、どのような認識論をもとに課題を生起し、どのような視角で、いかなる方法論が妥当なのか、すなわちスポーツ社会学的思考の諸前提について論議されることは極めて少なかった。菅原は、1977年に「スポーツ社会学の研究系譜」(菅原¹⁵⁾pp.1-9)の中で、欧米及び日本におけるスポーツ社会学の名称の確立期と社会学的方法でスポーツに関係のある社会現象を分析した研究を歴史的に並べ、かつ領域を区

1) 筑波大学
〒305 茨城県つくば市天王台1-1-1

1. University of Tsukuba, Tennodai, Tsukuba, Ibaraki (305)

分して検討している。この中で、菅原は、研究方法について、竹之下らが「すでに社会学的研究において用いられている方法や技術をそれぞれの必要に応じて用いれば良い」(菅原¹⁵⁾ p.7)としていることを受けて、「スポーツ現象やスポーツに関する社会問題を研究対象とするスポーツ社会学が、社会学の特殊的、専門的領域であるかぎり、それは社会学の方法に依拠するのが妥当であろう」(菅原¹⁵⁾ p.7)と述べている。確かに、1960年代において竹之下の前にあったスポーツ社会学の課題は、学校体育の民主化と科学化を実現するために、体育授業における小集団研究や生活の中での遊びの機能について、ソシオメトリーやソシオグラムといった方法を用いて研究することだったし、公害問題や余暇の重要性が指摘された中で、社会体育という用語が創造されて以来、社会学の枠組みでスポーツ人口の調査や企業の余暇活動調査を行うことを目前に迫った課題とした。しかしながら、ここにはすでに、社会学(者)とスポーツ社会学(者)との関係性について考えねばならない問題が含蓄していた。すなわち、スポーツ社会学という界は、あくまで社会学の一領域なのか、それともひとつの独立した領域として独自の理論と方法を打ち立てていくのかということである。P.ブルデューが「社会学者からは侮られ、スポーツ関係者からは軽蔑されるという、スポーツ社会学者が遭遇する独特の困難の根源が見出されるかもしれません」(ブルデュー³⁾ pp.272-273)というような「二重に被支配的」な状況が生まれるのは、スポーツ社会学が歴史的に生み出された瞬間から永久に抱え込まねばならない問題だったのだ。

スポーツ社会学の界としての位置、認識論及び方法論については、すでに77年に菅原が「今後のスポーツ社会学の研究方法は、社会学で採用されている方法や技術を駆使する段階を脱却して、スポーツ現象の社会学的研究にもっともふさわしい研究方法や技術の発見の段階へと前進しなければならないのではなかろうか」(菅原¹⁵⁾ p.8)と述べている。しかし、その意志が「スポーツ社会学は総合科学としてのスポーツ科学の基礎的研究部門として、スポーツ科学の理論構成を旨す」¹⁶⁾た

めのものであるとしている点については論議する必要がある。また、松村は、「『コミュニティ・スポーツ』論の社会学—『自己反省の社会学』(Reflexive Sociology)に触発されて—」(松村⁷⁾ pp.49—69)と題する論文の中で、これまでの「コミュニティ・スポーツ論」の視角に対する批判から、「個人」の「生活史」に依拠した実証的、理論的な研究の重要性を論じているが、この視点に立つことは、「生活者の持つ固有の論理を受けとめうる研究者の能力の開発の必要性」(松村⁷⁾ p.65)を唱えることと同じレベルで「研究者自らの拠って立つ前提を再度問い直す必要」(松村⁷⁾ p.65)性のあることだと言及する。このことを基盤にして、「我々体育・スポーツ社会学を目指す研究者が依って立つ土台と研究者自身の認識論的反省」(松村⁷⁾ p.65)の必要性を述べているが、これまでの状況について荒井の論を提示しながら展開しているものの、スポーツ社会学界の歴史的課題性や認識論を反省する点については、問題を提起した形にとどまっている。

しかしながら、山下は、両J.ハーグリーブス、J.ホーンのこれまでのスポーツ社会学および社会学における機能主義、またエリアスの形態社会学や文明化論について、価値関与性の観点から論じ、機能主義的思考に対するオルタナティブ理論を提示しながら批判している(山下²⁴⁾ pp.1-20)。それは、文化の規定性/相対的自立性、依存性・従属性/自立性、支配統制・強化/矛盾・抵抗、人間的作用力の強調、あるいは、没価値論の背後に存在する潜在的に秩序志向的な価値関与性の観点から、民衆の身体文化や身体活動の歴史的な自律性や被支配集団の操作や統制に対しての抵抗力の側面に注目し、さらに、現代社会で損汚されている人間的価値に対して「スポーツの持つ潜在的な変革の力を問題化すること」(山下²⁴⁾ p.10)を意図するものである。これは、社会学における社会構造と人間的作用力との関わり、あるいは、状況的理論命題を構築することにスポーツ社会学独自の視角から理論を提示できる可能性を垣間見ることのできる点で興味深い。

はたして、スポーツ社会学独自の課題として根

本的に存在するのは何か。社会学界の方法論に対する理論的貢献にとどまらず、スポーツ社会学者が自らの経験をふまえて考えねばならない問題とは何か。ここに、身体の問題を見出すことができよう。

文化における身体の問題は、1960年代から哲学、心理学、社会学、文化人類学、そして文学や芸術といった様々な領域で、時に領域を超えて論議されてきている。そこには、現象学や深層心理学、そして言語学をふまえた構造主義、記号学が思想の基盤としてあり、その系譜上に無意識の振舞いや身体そのものへの注目があると考えられる。未開社会で生活する人々の身体と感情そして無意識の構造への関心、その儀礼や慣習をふまえてのマクロコスモス（宇宙）につながるマイクロコスモス（身体）という象徴的な構図に着目したもの、あるいは、現代の我々に通底する錯綜体としての身体や身体間のコミュニケーションについての論考、さらに、身体の支配という巧妙に仕組まれた権力構造を言及したものなど。このほか、身体のイメージやしぐさ、姿勢、動作の文化的研究を含めると、身体を包む衣服、病い、奇形、変身、暴力などについても身体の視角から言及すべき課題として掲げられる。

こうした身体の視角は、人間の根源的な問題であってスポーツ社会学の範疇を超えて大きな広がりを持つ。しかしながら、スポーツ社会学固有の課題として取り上げるのはまさに以下の理由による。つまり、P.ブルデューが、「…社会科学はその大部分が、意識の手前で産出され、実践的な沈黙の伝達、身体から身体へとも言うべき伝達によって学ばれる、そうした行動についての理論を作り上げようと努力している…」(ブルデュー³⁾ pp.287-288)とした上で、「意識の手前で、言い表わす言葉さえ持たず、ただ自分の身体だけで理解する」(ブルデュー³⁾ p.288)もの、すなわち、スポーツや舞踊、身体教育における理解や動作の矯正といった身体にまつわる領域こそが、「理論と実践…言語と身体の間に関わる諸問題が最も強烈に立てられる」(ブルデュー³⁾ p.287)と述べているのである。P.ブルデューは、さらに、

身体と「団体精神」とのつながりに注目することで、身体的姿勢とそれに対応する感情をつなぐ弁証法的関係や、ある種の姿勢なり態勢が表現する感情について分析する手がかりが存在すると述べて(ブルデュー³⁾ pp.289-290)、身体を研究する視角を提示しているが、何より彼が身体の研究の重要性を強調するのは、意識/無意識、理論/実践、理性/非理性といった認識の枠組みを超える大きな可能性がそこに秘められているからである。身体を研究することは、社会科学の認識論及び理論構築に大きな揺さぶりをかけるのである。

H.アイヒベルグは、身体こそがスポーツ社会学の課題であるとして、「スポーツ社会学は、確固とした領域であり、他の領域の方法や考え方をスポーツに応用するだけのものではない。クラブの組織化、参与の形態、年齢や階級の層化、ジェンダーの表象などについての社会学は、スポーツ社会学の中心を構成するものではないだろう。そのパースペクティブは反対にある。すなわち、他の社会学者たちが語ることのできないひとつの物語を語りながらスポーツを見ること、社会的身体史の歴史である。つまり、基礎研究としてのスポーツ社会学である」⁴⁾(傍点は原著者)と述べている。ここには、身体をテーマにすることによって、スポーツ社会学独自の理論と方法を構築する可能性を見出すことができる。

このような身体の問題について、体育・スポーツの研究の中ではどのように取り扱われてきたのか。滝沢は、「運動の中で確かに身体と出会い、地平としての身体を図として意識する機会に恵まれている」(滝沢²²⁾ p.102)体育学の領域でこそ、「身心の相関性を主体的経験に即して、いわば実存的視点からとらえてゆく態度を示す」「身体論」²⁵⁾の視角から、現象学的アプローチによって、「『はたらき』としての構造を持ち、しかも学習することによって不断に再構造化される」「身体の論理」が解明されなければならないことを論じている(滝沢²²⁾ p.102)。そして、人間が身体的時空性を枠ぐみとして、知覚内容を構造化していくことを、身体的対話や身体的判断を含めて明らかにし、そのことから「身体の論理」を究明しよう

としている²³⁾。また、佐藤は、体育概念を哲学的に考察する一連の研究の中で、体育的身体論を批判し、「可能態としての身体性」こそが重要であると述べている¹²⁾。これらの身体に関する研究は、滝沢にみられるように現象学的アプローチによって身体運動の際の身体の論理を解明するものであり、また佐藤にみられるようにその概念を論じることから分析しようとするものといえよう。

これらに対し、舛本は、「『からだ言葉』から見た身体の構造(1)」⁵⁾で、言葉の用法を提示しながら〈身〉と〈体〉を分析することで、日本の文化的コンテクストから身体性を明らかにしようとしており、さらに、「体育座り—体育授業における暗黙の身体的暴力」⁶⁾の中では、身体技法としての座りの文化性をふまえながら、体育座りが学校文化における身体の管理・統制といった暗黙の暴力性を含んでいると論じ、体育科教育における身体技法を日本人の歴史的に持つ身体技法の中で分析しようとしている。また、佐伯は、「体力の社会学(試論)」¹¹⁾で、体力が社会的諸属性(性、職業、社会的地位)によって規制されていることを検討し、その上で社会変化と体力との関連性について歴史的に論じている。体力問題をどのように社会科学に取り上げるべきかを目的とした論文ではあるものの、体力と社会的諸属性についての視角を提示している点で、舛本の論文と共に身体社会学としての視角をすでに含んでいると考えられる。

さて、本論文では、こうした先行研究がみられるものの、スポーツ社会学固有の課題としての身体を研究することが、どのような意義と可能性を持つのかを身体に注目しつつ認識論についての論議を絶えず巻き起こしてきたフランス民族学・社会学における認識論の系譜を追いながら論じてみたい。このことは、身体社会学を構築する意義を明確にすると共に、その具体的戦略を提示することにつながるだろう。その上で、若干の具体的課題を述べていくことにする。

2. 身体への視角—M. モースから P. ブルデュューへ—

身体に対してどのような視角でこれまでの研究

がなされてきたかについて、ここでは、M. モース、C. レヴィ＝ストロース、そして P. ブルデュューの流れを追うことにしたい。身体に注目することが、いかなる認識論的変革を可能にするのかということに対して、フランス民族学・社会学の系譜には、主観主義／客観主義、実践／構造、経験／理論、通時制／共時性といった二項対立を乗り越えることを社会科学の課題としてとらえ、同時に身体に注目していったプロセスが読み取れるだろう。これらは、身体社会学についての研究を押し進める具体的な戦略として考えることもできる。以下では、田原音和「構造主義と社会学—デュルケームからレヴィ＝ストロースへ—」(田原¹⁸⁾ pp.1-28)、「構造と実践のあいだ—ピエール・ブルデュューの場合—」(田原²¹⁾ pp.51-80)、「社会学的认识論について—現代フランス社会学における『理論』の問題—」(田原¹⁹⁾ pp.355-387)及び、「歴史のなかの社会学—デュルケームとデュルケミアン—」²⁰⁾の諸論文と著作を参考にしながら述べていく。

(1) M. モース ; 〈身体技法〉の視角と方法

C. レヴィ＝ストロースは、「マルセル・モース 論文集への序文」(レヴィ＝ストロース¹⁰⁾ pp.1-46)の中で、M. モースの視角と方法について以下のようにまとめている。そして、特に、M. モースが全体的社会事実を一貫して強調したことに注目する。全体的社会事実とは、「第一に、〈機能的に分化した存在ではなく全体的存在としての人間の行動を観察すること〉を可能にする個人の生活歴のなかに具現され、つぎにまた、断片的な研究でなく、あらゆる行為のもつ身体的、生理学的、心理的、社会学側面を同時に考察せしめる学問の体系としての人類学(語のもっとも古い意味があてはまることは明らかである)の中に具現される」(レヴィ＝ストロース¹⁰⁾ pp.16-17)ものである。だから、M. モースの関心は「一つは社会的なものとの個人的なものとの関連づけること、他の一つは、身体的(もしくは生理学的)なものとの心理的なものとの関連づけることである」(レヴィ＝ストロース¹⁰⁾ p.17)したがって、以下のような方

法論を言及したのである。

「われわれがある制度の影響を個人の意識において再確認するのではないが、その制度の意味や機能を把握したと確信することはできないのである。この個人の意識のうえに与える影響は制度というものの全体を構成する部分であるので、一切の解釈は、歴史的もしくは比較的方法による分析のもつ客観性を生きた経験のもつ主観性に合致させなければならない。われわれは、モースの思想が指し示すもの一つとおもえる方向を追求しているうちに心理的なものと社会的なものとの相互補完性という仮説にいましがた到達した。この補完性は、嵌め絵パズルの片割れ同士のような静的なものではなく、動的であって、心理的なものが象徴的表現—これは心理的なものの枠をはみだす—にとって単なる意味の要素であると同時に一つの実在を検証する唯一の手段であるということにもとづいているのである。そして、この実在のもつ多様な面は、心理的なものをのぞいてなされた総合によっては把握されえない」(レヴィ＝ストロース¹⁰⁾p.18)。

M.モースはたえず《全体性》を頭におき、様々な側面が複雑に絡み合っている社会を、全体的存在、《総体人》としての個人の生活歴の中で把握していこうとし、その時、生理心理学、社会学、歴史学の結び合わされた努力が必要であるというのである。このような考え方は、多年にわたる現地での民族学的研究の中で身体そのものを観察し、それがひとつの視角から捉えられるものでなく、様々な角度から捉えるべきものであると考えたことに起因しよう。そして、身体への具体的アプローチを以下のように考えた。レヴィ＝ストロースは以下のように述べている。

「モースは、各社会が個人に対し一定の厳格な身体の使用を義務づけるしかたの研究が人間の科学に決定的な価値を有することを確認する…。社会構造がその特徴を個人にきざみ込むのはまさに欲求と身体活動の教育を媒介としてであり、《ひとびとは、…反射運動を馴致するよう…子供を訓練し、…恐怖心を抑制し、停止と運動とを選択する》。この社会的なものへの個人的なものへの投影

にかんする研究は、身体の使用や行動をより深く究明させずにはいない。この研究領域には、無価値なものも無根拠なものも、余計なものも一つ存しない」(レヴィ＝ストロース¹⁰⁾p.3)そして、「…人間の身体という道具は、普遍的ではあっても各人の処分に委ねられていて、そのもつ可能性はきわめて多数かつ多様であるので、われわれは、われわれの特殊な文化の要求に含まれるつねに部分的で限定されたものを除いては、これらの可能性を無視しつづけるのである。しかしながら、野外研究をしたことのあるすべての民族学者は、これらの可能性が集団によって驚くほど相違するというを知っている。刺激閾や抵抗の限界は各文化によって違うのである。…伝統的に習得され伝承された個々の技術や行動は、精神と筋肉との一定の共同作用にもとづくものではあるが、これは社会学的な全脈絡関係と有機的に結びついた真の意味の体系を形成している。(社会的であると同時に身体的でもあるような偉大な構造物としてC.レヴィ＝ストロースは、種々の体操、呼吸術、サーカス曲技、スポーツを挙げている。) (レヴィ＝ストロース¹⁰⁾pp.4-5)

ここには、「各社会が個人に対し一定の厳格な身体の使用を義務づけるしかたの研究」(レヴィ＝ストロース¹⁰⁾p.3)すなわち、身体技法に注目し、さらに「…この身体技法の内在的重要性をも強調した」(レヴィ＝ストロース¹⁰⁾p.4)ことがわかる。そして、身体技法の概念と全体的社会事実の視点についてM.モースは以下のように述べている。「(泳ぎ方や、シャベルの使い方を例に挙げながら)…いわゆる技法なるものすべては、その独自の型をもつ。…わたくしは、多年にわたって《型》(habitus)の社会性という概念を暖めてきた。…この言葉は、アリストテレス(心理学者であったのだが)が用いた《素質》、《知識》、《能力》という意味を《習慣》(habitude)とは比較にならないほどに巧みに表現している。…この《習慣》というものは、個々人や彼らの模倣とともに変化するだけではなく、とりわけ、社会、教育、世間のしきたりや流行、威光とともに変化するものである。通常我々は精神とその反復能力のみし

か見出さないところに、技法 (techniques) と集合的個人的な実践理性を見出す必要がある。…そこで、わたくしは、単一の考察のかわりに三重の考察に訴えなければ、走り、泳ぐなどのこれらの一切の事実について、なにびとも明確な見解をもつことはできないという結論を下すのである。三重の視点、《全体的人間》の視点こそが必要なのである。わたくしは、有効で伝承的な行為を技法と呼ぶ。それは伝承的で、しかも有効でなければならない。伝承なくしては、技法も伝達もありえない。…身体こそは、道具とまでは言わなくとも、人間の欠くべからざる、しかももっとも本来的な技法対象であり、また同時に技法手段でもある。そうすると、わたくしが記述社会学で《様々な》と分類したものの、かの大範疇そのものが、たちまちこのような見出しから消え失せ、形式と内容を取得することとなり、われわれはそれをどこに位置づけるべきかが分るのである」(Mauss, M.⁸⁾ pp.367-372)

よって、身体技法は、人間の伝承的かつ有効な行為であり、集合的個人的な実践理性による独自の《型》(habitus)をもつものと定義できる。そして、M.モースは、これを収集し、目録化し、生理心理学、歴史学、社会学の三重の視点から分析する必要性を説いたのである。

具体的には、技法が獲得されるメカニズムの重要性にふれながら、以下のように身体技法の伝記的列挙を行っている。1. 出産と産科学の技法 2. 幼年期の技法—子供の養育と栄養(抱きかた、離乳、揺籃、飲食、歩き方、柔軟体操など) 3. 青年期の技法(入社式、教育、職業) 4. 成年期の技法(眠り、休息、ダンス、歩き方、走り方、舞踊、跳躍、登攀、降下、水泳、力わざの運動、投げる、つかむ、体の手入れ、食べること、飲むこと、生殖、看護や矯正、マッサージなど)(Mauss, M.⁸⁾ pp.376-383) である。

このような、M.モースの思考をC.レヴィ＝ストロースは、「人体のあらゆる可能性や個人の技術の向上のために採用されている修業と訓練の方式を目録化すれば、まことに国際的な作業の典型を示すことになろう」(レヴィ＝ストロース¹⁰⁾

p.5) とし、また、「遠い昔に行なわれた民族移動や文化的接触や模倣についての疑うべくもなく豊富な情報をもたらすであろうし、世代から世代へと伝えられてきた一見意味のない身振り、そしてその意味のなさそのものによって守られてきた身振り」(レヴィ＝ストロース¹⁰⁾ p.6) に注目することで、「身体の習性の考古学」(レヴィ＝ストロース¹⁰⁾ p.6) を展開することができるかと評価した。

(2) C.レヴィ＝ストロース;《無意識》への注目

M.モースが《全体的社会事実》に注目しながら、身体技法に焦点をあて、社会と個人との関わりを明らかにしようとしたのに対して、C.レヴィ＝ストロースは、無意識に注目しながら以下のような認識論を展開した。すなわち、「社会的事実が全体的であるということは、単に観察されるものはすべて観察するということの一部を構成していることを意味するだけでなく、それはまた、観察者と観察の対象とが同質の科学の場合にはとりわけ、観察者みずからがその観察の一部を構成することを意味する…社会的事実を適切に理解するためには、それを全体的に、すなわち物として外部から把握しなければならない。だがしかし、物として把握するということはその(意識的および無意識的)主観的把握を必要不可欠とすることである。というのは、人間であるかぎり、われわれが民族学者としてその事実を観察するのではなく、まさに原住民としてそれを生きるとすれば、どうしてもこの主観的把握を経なければならないからである。問題は、どのようにすれば、この意図を達成することができるのかを知ることであるが、これはたんに一つの対象を外部からと内部から同時に把握するというだけの問題ではなく、より以上のことを要求する問題である。つまり、内在的把握は(原住民のそれ、あるいはすくなくとも、原住民の経験を追体験する観察者のそれ)個々の要素にたいして一つの全体像を与える外在的把握の観点からとらえなおさなければならないのであり、この全体像は、有効であるために

は、体系的かつ整合的なかたちで示されなければならない」(レヴィ＝ストロース¹⁰⁾ pp.18-20) とした。これは、田原音和のいうように、「…対象者の体験および研究者によるその追体験という主観的把握を外的要素として包攝する研究者の客観化する主体的努力にはかならない。その意味で社会的事実を物として外部から把握するということは、つきつめていうと研究者の複眼的な主観性を徹底させることにかならないのである。いわば方法論における古典的な二律背反ともいべき客観主義と主観主義の対立をのりこえ、徹底した主観化のうちに両者を揚棄しようとするのがレヴィ＝ストロースの方法論的特徴である」(田原¹⁸⁾ p.7) ということができる。したがって、無意識の世界は、以下のように分析方法のひとつとして考えることができる。つまり、「無意識の世界は自己と他者との媒介項であり、「この(無意識界の)層は、われわれ自身の外へでることなく、あらゆる人間の、あらゆる時代の、あらゆる精神生活の諸条件、すなわち、われわれのものであると同時に他者のものである諸活動形式に、われわれを合致させてくれる」かぎり、精神分析におけると同様に「民族学上の調査においても、われわれとは最も異質な他者に対してあたかも別個の自己に対するがごとく接近させる」ことを研究者に保障することになる」(田原¹⁸⁾ p.8) といえるのである。

このように、C.レヴィ＝ストロースは、行為者(未開人)自身も気づかない、しかし、研究者も持ち合わせている無意識の構造を構築し、両者の普遍性を基盤としてその理論的展開の客観性を保障しようとしたのである。研究者と生活者、認識する側とされる側の認識論の立場から、自然／文化、主観／客観、通時性／共時性といった二項対立を無意識の構造をもとに乗り越えようとしたのだといえよう。

(3) P.ブルデュー;〈ハビトゥス〉の視角と身体への視線

E.デュルケム以来の社会の客観的把握という課題に対して、C.レヴィ＝ストロースは、M.

モースの業績をふまえて、「われわれのものであると同時に他者のものでもある無意識の構造」という体系を構築し、そのルールの普遍性を説いた。しかしながら、彼は、未開人の主張や意志表示といった等身大でありのままの人間の言説や行為、いかなれば生の実践を表出させていない。それよりも、未開人自身も気づかない無意識の構造を構築し、その理論的展開を優先させたからだと考えられよう。これに対して、P.ブルデューは、行為者がなぜ構造の中でその行為を成しえるのかを分析する。つまり、どうして行為者は、無意識とはいえ構造を再生産する行動をとるのかに焦点を当てるのである。

当初、C.レヴィ＝ストロースに師事し、その構造人類学的方法で、アルジェリアのカビール人の村々において実地調査を行っていたP.ブルデューは、構造としての父方平行イトコ婚というルールに合致した事例が実際には3—6%の頻度しかないことから、「婚姻交換の当の集団間の相対的な立場をめぐる多様な関係(より大きな集団内における、系譜的、経済的、社会的、象徴的關係など)に対する当の呼びとの評価から生れた、さまざまな戦略から」(田原²¹⁾ pp.51-80) 婚姻交換のある形態が選ばれていることをつきとめる。そして、彼は、このカビールや南仏ベアルンでの調査から「客観主義的認識の実体化を棄て、行為者の実践の生成の諸構造をとらえる方向へと転換する」(田原²¹⁾ p.71) ようになる。

そして、P.ブルデューは、「観察可能かつ測定可能な諸規則性に従って体系化され諸行動の客観的な意味と、個々の行為者たちが彼らの生活条件および彼らの行動の客観的意味を客観的に規定する右の諸規則性を受け入れる個別的な諸関係との、双方をともに包み込むことができる体系をなお構築しなければならぬ」(Bourdieu¹⁾ pp.703-704) として、新たな理論構築の必要性を説いた。すなわち、C.レヴィ＝ストロースが無意識の構造によってシステムティックに理論を展開させていったのに対し、P.ブルデューは、行為者の実践に注目しながら、ハビトゥスを媒介項として主観と客観との乗り越えを果たそうとするのであ

る。

田原音和は、C.レヴィ＝ストロースを乗り越えようとするP.ブルデューの意図を以下のようにまとめている。「人類学者が日常的にその理論的認識において開示するものと、行為者が日常的認識において開示するものとが異なることはいうまでもないが、後者の第一次的経験の構造を理論化して前者の理論的認識と統合する第三の理論を構築する必要がある、とブルデューは主張するのである。これを理論的認識のレベルで見直せば、客観的諸関係の体系構築をめざす構造主義が、それゆえに括弧にくくってしまう第一次的経験の拒絶というやり方は、こうした行為者たちとその客観的諸関係とのかかわりに関する理論構築のための、まさしく予備的な作業だったということになるわけである」(田原²¹⁾ pp.64-65) と。そして、この第三次元の諸関係の体系を構築するための媒介項として、ハビトゥスを設定するのである。「客観的諸関係は、行為者たちの諸性向の体系の内において、かつそれを通してでなければ、究極的に存在しないし、それ自体を現実に実現することはない。そして、この諸性向の体系は右の客観的諸条件の内在化によって作りだされるものである。この客観的規則性の体系と直接に観察可能な行動の体系との間にはつねにある媒介が介在する。それは、まさしくハビトゥス以外のものではありえない。このハビトゥスとは、さまざまな決定論とある個人的な決定とが会合する幾何学的軌跡であり、計算可能な確率と日常的に生き続ける期待との、客観的な未来と主観的なプランとの出会いの場である。こうして、たとえば有機的であると同時に精神的な諸性向の一体系として、さらに思考、知覚および行為の無意識的な枠組みの一体系としての階級のハビトゥスは、客観的な規則性と合致するあらゆる思考・知覚・行為を、予想もしない新しさの創造だとか自由な即興の産物だとか、それなりに十分根拠のある幻想から生産することを可能にする。というのも、ハビトゥスそれ自体がこれらの規則性によって客観的に規定された諸条件の内、またこれらの諸条件によって生み出されたものにはかならないからだ」(Bourdieu¹⁾ pp.

705-706) というのである。

このハビトゥスは、以下のように定義できよう。すなわちハビトゥスとは、特定の人々に共通した行動の社会的スタイル、心身の処し方、習性性の体系である。それは、歴史の産物として過去から生み出され、身体に記憶されたもので、「自然となった歴史、それゆえに歴史としては忘れられてしまう歴史」をもち、「その過去のすべてが現在において活発に存在している」ものである。そして、この歴史を内在化したハビトゥスは、「個々人を越えた集合的な歴史の産物である客観的諸構造がうまく再生産されていくのに必要な、教え込みと獲得の作業」によって生み出される。つまり、社会や個人の歴史の中における実践によって、無意識のうちに、人々に内在化された心身の身の処し方がハビトゥスであり、これを介して実践として外在化すると考えられるものである(ブルデュー³⁾ pp.272-273)。これは、「外なる客観的構造を内在化し、実践を通して外在化する原理が、内在的な心身の構造としてのハビトゥスであり、それは客観的構造と実践とを媒介するもう一つの構造(心身の)である」(田原²¹⁾ p.69) とまとめることができよう。

3. 身体社会学における具体的戦略

(1) 身体社会学の可能性

これまでみてきたように、社会科学の認識論の変革は、身体への視線と重なり合った形でなされてきたといえるだろう。M.モースは、全体を構成する制度を社会的なものとして心理的のものを合わせた《総体人》としての個人の生活歴の中で、主観性に合致させながら把握する必要性を民族学の調査の中で感じ、人間の伝承的かつ有効な行為として身体技法の概念を構築した。それは、集合的個人的な実践理性による独自の《型》(habitus)を持つものであって、C.レヴィ＝ストロースのいうようにまさに社会学的な全脈絡関係と有機的に結びついた真の意味の体系を考えることができるものである。M.モースのこの視角は、我々に身体を社会学的に考察する必要性を認識させる。

こうした、一見主観的なものを客観的に取り上

げようとする試みに対し、C.レヴィ＝ストロースは、観察者の被観察者に対する認識の枠組みとしての無意識の構造に眼を向けるに至ったのである。この普遍的な構造を構築したことは、自然／文化、主観／客観、通時性／共時性といった二項対立を乗り越える認識論の新しい地平を切り開いたといえる。これに対し、P.ブルデューは、個人を超えた集合的な歴史の産物としての客観的諸構造 — 身体に記憶され、「自然となった歴史、それゆえに歴史としては忘れられてしまう歴史」を持つもの — と、個人の新しい創造、自由な即興の産物としての心身の処し方とを合わせたものとしてハビトゥスを概念化した。すなわち、客観的構造と主観的実践とをハビトゥスの概念によって超克しようとしたのである。このP.ブルデューの認識論的変革がとりもなおさず「意識の手前で、言い表す言葉さえもたず、ただ自分の身体だけで理解する」(ブルデュー³⁾p.288)ものの理論を社会科学こそが構築しなければならないという目的をふまえたところにあるならば、まさに、身体を社会的に研究する意義は具体的事象からの分析、考察を繰り返して、認識論の新たな地平を開くことにつながるだろう。こうした身体の社会学の視角は、スポーツの現象にとらわれていたこれまでのスポーツ社会学の領域を広げ、主観的実践と客観的構造を同時に持ち合わせ、意識／無意識、言語／非言語の境界を抱え込む身体という大きな領野で考察することの必要性を我々に提示しよう。このことは、スポーツ社会学が社会学の一領域であるかどうかという点について論議することを超えて、社会科学の理論をふまえながら、なおかつ既成の理論に対する新たな地平を切り開くスポーツ社会学独自の理論と方法を構築する大きな可能性を見出すことができることを意味する。

(2) 身体技法の歴史・社会的分析課題の例 — 軍事訓練と体育科教育における身体 —

これまでの身体技法の概念や認識論の展開をふまえて、スポーツ社会学固有の課題としての身体を考えたとき、以下のような具体的テーマを提示

することができる。

すなわち、日本人の身体技法の特性としてみられる、集団において全員が「きれいに」「そろって」歩く、「きちっと」並ぶ、「一斉に」挨拶する、「ちゃんと」立つという行為と、それが「きちっと」して、「きれいだ」と感じることを、すなわち、そのような身体技法とそれを支える精神の歴史を探ることが課題のひとつとして挙げられる。そして、これを形成してきた基盤として、例えば、体育科教育における身体の歴史性と精神性を探っていくことが分析の糸口になろう。それについては、以下のように3つの具体的問題が提示できる。すなわち、

- 1) 体育科教育における身体技法の規格化と再生産の過程(「潜在カリキュラムの問題」)
- 2) 体育科教員のハビトゥス
- 3) 体育科教員を養成する体育教員養成課程の思想と系譜

である。体育科教育における身体の動きの規格化とその歴史について制度史からみれば、軍隊における身体の規格化と学校におけるそれとの関連性が指摘できよう。そして特に、1921年のワシントン軍縮会議後の1925年4月11日陸軍現役将校学校配属令によって、現役軍人が学校の教練指導にあたったことは、軍人の身体性が学校生徒の身体に直接影響を及ぼした点として注目される点である^{13,14)}。このような課題に対して、制度を体現した身体の歴史 — 個人史 — にスポットを当て、心理学・生理学的考察を交えて分析していくことが方法として要求されよう。

(3) まとめとして

本論文は、身体社会学を構築する意義と可能性として、1)スポーツ社会学における課題設定の歴史性を論じた上で、2)スポーツ社会学固有の課題としての身体を研究する意義を認識論の新たな地平を開く可能性から論じ、3)若干の具体的な問題を提示したものである。身体社会学の課題は、医療にみられるような人間の生理学・解剖学的な身体の側面とは異った、様々な身体技法、身体の手入れとしての美容、ボディ・ビルディ

ングといったファッションや趣味としての見かけの身体の側面、さらに、ポディー・イメージやセクシュアリティや擬似的現実 (virtual reality) といったイメージとしての身体の側面など多岐に渡っている。今後、これらに対して、具体的な実証を積み重ねていかなければならないだろう。そうすることは、多木浩二が、「自分自身がどのように制約された存在なのか、歴史の中の一つの存在であって、かつ都市のなかの断片であり、それから世界のすべてを理解することができない存在であるということ認識することが、なんでも解釈できるように思う自分自身から自由になることです。自分が長い歴史の、多様な歴史のあるいは多様な社会の一部分であることを認識するのは、自己の限界を知るように思えるけれども、それは人間を矮小化することではなくて、むしろ人間が人間を正確に認識することだと思います。…逆説的に聞こえるでしょうが、人間が自己の限界を発見することが、自由になることだと思うのです」¹⁷⁾というように我々に個人個人の身体を再確認し、そこから身体の潜在的可能性を探る試みなのである。従って、身体に関して幅広い視角から理論化をはかり、方法論について考えながら実証を積み重ねることは、社会科学の認識論、方法論に多大な影響を及ぼすに違いない。

もちろん、身体こそがもっとも重視されるべき体育やスポーツの領域にあって、歴史的に習慣化されている体育科教育やスポーツ実践の方法に対して、無意識のうちに刻み込まれた身体の歴史性、社会性を改めて解明することから、身体の解放を論じていくことは重要であるに違いない。しかしながら、身体社会学の可能性は、身体を媒介として行われる多様な営みの中で体育やスポーツだけを切りとって議論することにとどまるものではない。それは、歴史的、社会的、文化的コンテクストあるいは自然の中に根づいている身体をはじめから前提にしているため、体育やスポーツあるいはレジャーの時・空間だけを問題にすることはまったく不可能なのである。けれども、意識／無意識、理論／実践のあいまいさを身体に刻み込んでいるスポーツ社会学者が、身体技法、見かけの

身体、イメージとしての身体のそれぞれの側面にアプローチしていくことで、歴史的、社会的、文化的コンテクストにおいて、身体を契機に体育やスポーツを浮かび上がらせることができるだろう。

ここには、体育学、スポーツ科学といった範疇を改めて問い直す必要性が含まれている。そして、それはまた、学問の界における体育学、スポーツ科学の位置を脱構築していくことにつながるだろう。

(謝辞：本論文をまとめるに際し、故田原音和先生の筑波大学体育科学研究科集中講義に多大なる影響を受けたことを末筆ながら記しておく。)

注

注 1) 岡田は、これに異をとらえ、「体育・スポーツ諸理論の歴史的掘り起こしを、特に戦後に限定することなく、すすめるべきであろう」とし、日本におけるスポーツ社会学の源流について論じている¹⁹⁾。

文献 (References)

- 1) Bourdieu, P. (1968) Structuralism and theory of sociological knowledge. *Social Research* 35.
- 2) Bourdieu, P. (1968) *Le sens pratique*. Minuit: Paris, pp. 88-96. 及びブルデュー：今村仁司、港道 隆訳 (1988) *実践感覚 I*。みすず書房：東京, pp. 83-91 を参考にまとめた。
- 3) ブルデュー：石崎晴己訳 (1988) *スポーツ社会学のための計画表。構造と実践*。新評論：東京。
- 4) アイヒベルグ：清水 論訳 (1992) *身体文化の革命？スポーツ社会学の課題と将来*。へるめす 37:164.
- 5) 舛本直文 (1988) 「からだ言葉」から見た身体の構造(1)―(身)の用法と(体)の用法―。体育・スポーツ哲学研究 9/10:41-56.
- 6) 舛本直文 (1992) *体育座り―体育授業における暗黙の身体的暴力*。体育原理専門分科会編 *スポーツの倫理*。不昧堂出版：pp. 81-99.
- 7) 松村和則 (1986) 「コミュニティ・スポーツ」論の社会学―「自己反省の社会学」(Reflexive Sociology) に触発されて―。体育・スポーツ社会学研究 5:49-69.
- 8) Mauss, M. (1985) *Sociologie et anthropologie*. Quadrige/PUF: Vendôme.
- 9) 岡田 猛 (1982) *日本におけるスポーツ社会学の源流―林 要氏の所説の検討―*。体育・スポーツ社会学研究 1:5

- 10) C. レヴィ＝ストロース：有地 亨・山口俊夫訳 (1976), マルセル・モース論文集への序文. 社会学と人類学Ⅰ. 弘文堂：東京.
- 11) 佐伯聰夫 (1983) 体力の社会学(試論). 名取礼二監修 健康・体力づくりハンドブック. 大修館：東京, pp. 44-68.
- 12) 佐藤臣彦 (1987) 体育概念における身体性の哲学的考察—わが国における体育的身体論批判—. 筑波大学体育科学系紀要 10：11-21.
- 13) 清水 諭・小谷寛二 (1990) 身体技法の歴史・社会的分析に関する研究(その1) —体育科教育における身体の規格化と再生産—. 第41回日本体育学会発表資料.
- 14) 清水 諭 (1992) 身体技法の歴史・社会的分析に関する研究—軍事訓練と体育科教育における身体—. 第1回日本スポーツ社会学会発表資料.
- 15) 菅原 禮 (1977) スポーツ社会学の研究系譜. 体育学研究 22.
- 16) 菅原 禮 (1984) スポーツの社会的理解. スポーツ社会学の基礎理論. 不昧堂出版：東京, p. 17.
- 17) 多木浩二 (1990) 自由について 今, 身体をどう語るべきか. 現代思想 19(4)：118-119.
- 18) 田原音和 (1975) 構造主義と社会学—デュルケムからレヴィ＝ストロースへ—. 東北社会学会編 社会学年報.
- 19) 田原音和 (1977) 社会学的認識論について—現代フランス社会における「理論」の問題—. 岡田与好他編 「社会科学と諸思想の展開—世良教授還暦記念下—」. 創文社：東京, pp. 355-387.
- 20) 田原音和 (1983) 歴史のなかの社会学—デュルケムとデュルケミアン—. 木鐸社：東京.
- 21) 田原音和 (1987) 構造と実践のあいだ—ピエール・ブルデュールの場合—. 東北社会学研究：51-80.
- 22) 滝沢文雄 (1986) 「身体の論理」序説—前川峰雄の身体論を手掛かりに—. 体育学研究 3.
- 23) 滝沢文雄 (1986) 身体の論理性. 体育・スポーツ哲学研究 8：29-43. 及び, 滝沢文雄(1988)身体の構造化—身体運動への現象学的アプローチ—. 体育学研究 32：211-219.
- 24) 山下高行 (1991) スポーツ社会学における再生産と生産の視角—方法論上の成果と課題によせて—. 体育・スポーツ社会学研究 10：1-20.
- 25) 湯浅泰雄 (1977) 身体—東洋的身体論の試み—. 創文社：東京, p. 3.

(平成3年8月12日受付)